

第3章

横浜国立大学
社会科学系部局
百年史 1923-2023

教育研究・学生生活の 回想と同窓会

100 周年に思うこと

第15代 横浜国立大学 学長
名誉教授 長谷部 勇一

社会科学系創立100周年にあたり、今後の社会科学系部局の未来の発展に向け、経済学部長、国際社会科学部研究科長、学長経験者としての思いや期待を述べさせていただく。

創立80周年

2004年12月に執り行われた「創立80周年記念式典」では、当時経済学部長として以下のような謝辞を述べた。この年は、丁度、国立大学法人としての出発とも重なり、今後の社会科学系の発展の方向性として2つの事を強調した。第一は、横浜高商以来の伝統でもあり、横浜国大憲章の精神でもある「実践性」である。2004年から経営系ではビジネススクールと国際経済法学系ではロースクールを立ち上げ、経済学部でも工学部の建築系と連携して地域実践教育研究センターの立ち上げに動いたのもこの年になる。ここでいう実践とは、単に理論を検証するというだけでなく、生きた現実から学び、新たな学問的課題を発見することも含まれるものとして実践性の意義を強調した。

第二は、「国際性」である。当時、社会科学系の大学院における英語コースは文科省も認める大きな特色であった。1996年からの世銀との共同プログラムを皮切りに、国税庁、インドネシア政府、JICAなどと提携して、途上国から政策留学生を受け入れ、インフラマネジメント、租税・公共政策などの分野で人材育成を行った。卒業生は現在では、おそらく300名を超え、それぞれ母国政府等で活躍しており、英語プログラムの卒業生の活躍は、YNUの国際貢献の分野における社会的インパクトの一つであ

る。残念ながら現在ではインフラマネジメントと JICA だけとなり縮小したが、途上国から多様で優秀な学生が入学して教員が英語で教えるという経験は、教育の国際水準を高めること、そして YNU の国際認知度をあげる上で多大に貢献すると思われる。

学長時代

その後、私は 2015 年に学長に就任し、以下の 3 つのことを学長ビジョンとして重視した大学運営を行った。第 1 は、21 世紀に入り、世界経済は中国やインドなど新興国が台頭する時代になったことを「グローバル新時代」と捉え、大学の研究や教育もそれに応えようというものである。第 2 は、「文理融合」の推進である。常盤台キャンパスには、5 学部と 5 大学院が存在し、ワンキャンパスの大学になっている。加えて、全ての学部の上に修士、博士のある大学院があり、名実ともに研究大学となっている。また、他の大学と比較して学内の教職員の横断的な交流が活発である実績を踏まえ、人文系、社会系、理工系が融合することで、一層の研究力の強化を図り、グローバル・エクセレンスな大学としての発展を目指した。第 3 は、「グローバルとローカルの接点」としての横浜、神奈川に着目した教育と研究の推進である。横浜は、時代の先端を行く国際都市として発展し、最近ではイノベーションタウンとしてグローバル企業が集積している。他方、産業空洞化、中小企業の経営悪化など問題も生じ、神奈川全体でも一次産業の衰退の問題の他、少子高齢化・人口減少などが社会問題となっている。大学として研究成果をグローバルに発信するだけでなく、ローカルな社会課題にも積極的に立ち向かい、課題解決を地域と共に一緒に考えようということを推進した。

国際水準の研究大学を目指して

幸いなことに、現在の梅原学長も研究大学として発展すること、地域課題に積極的に立ち向かうという方針を更に発展させ、着実に成果を出されていることを大変嬉しく思う。一方で、2024 年 11 月 5 日、アメリカではトランプ氏が大統領として復帰することが明らかになり、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ地区への攻撃など、世界の経済社会は益々予測不可能になることが危惧されている。このような時代だからこそ、研究大学として未知な課題に積極的に対応する責務があると感じている。今後とも、人文系、社会系、理工系がワンキャンパスにある強みを活かし、三層のイノベーションの推進、すなわち、人文系の知で人間社会の今後のあるべき姿を考え、理工系の知でそのための科学技術の発展を担い、社会系の知でその社会実装を図るという 3 分野の知を融合することが必要である。100 周年を新たな節目として、日本及び世界のイノベーションを牽引する大学として未来の横浜国立大学が輝く存在となること、その土台の一つとして社会科学系部局が益々発展することを期待するものである。

YBS 開設とその周辺環境

横浜国立大学

名誉教授 溝口 周二

私は横浜国立大学の在職 29 年間の内に経営学部長、国際社会科学研究科長及び評議員として経営関連部局を中心に勤め、その後 2009 年から 2014 年までの 6 年間を理事（教育担当）・副学長として大学全体の成長・発展に努めてきました。経営学部の仕事では YBS の設置、全学では東北大震災時における後期試験の中止等が心に残る事案でした。ここでは紙幅の関係から YBS 設置に向けての前段階として、周辺環境・実施プロセス及びその問題点などを中心に記したいと考えています。記録にない事柄も多く、正確な時間・固有名詞等の記憶に基づく誤謬、誤解及び思い込み等についてどうかご容赦のほどをお願いいたします。

1. 大学を取り巻く環境変化

1990 年代後半以降に国家レベルの財政問題から派生し、国立大学の存在意義が問われ、「国立大学」から「国立大学法人」への法人化が議論されました。これを受けて、2004 年から「国立大学法人横浜国立大学」と名称変更がなされ、そのガバナンスも大きく変化しました。この時期は大学と社会との距離を縮め、将来の経済発展の基礎となる専門職の育成が必要との議論から法律専門職大学院（いわゆるロースクール：LS）、会計専門職大学院（いわゆるアカウンティングスクール：AS）の設置が要請され、当校にも LS が 2004 年に設置されました。

2005 年に北海道大学、東北大学の国立大学 2 校が AS を設置しました。当校には経営学部会計学科として、簿記・財務会計・監査・原価計算などの伝統的会計に加えて環境会計、国民会計などの多彩な会計科目及び人材が整備され、首都圏において AS 設置の有力な主要国立大学としての外部要請がありました。しかし、問題は院生の対象が社会人で講義品質の要求も強く、AS 担当は学部の講義及びゼミナール担当から外れて AS に専従するとの情報がありました。加えて、夜間主授業も会計学科教員が一部負担しており、教員の授業負担が重くなることも考慮が必要でした。結果として、大学内外から AS 設置に関する要請はありましたが、AS 受入の検討は 2000 年初め頃には会計学科で中止としました。

2. YBS 設置に向けて

当校における経営学・会計学などの蓄積された知のリソースを将来のビジネススクール間の競争の中で YBS のブランド化をどのように図るかと言う課題がありました。このために AS ではなく、経営学全体としての思考力・実践力を有する社会人の要請を目指して YBS の理念、目的などを熟議しました。これを実践するための開設場所、教授陣、施設などを決定して、2004 年 4 月に YBS が開講しました。特に問題となったのは開設場所でした。

開設場所は本当に悩ましい問題でした。当時は横浜市役所内の夜間未使用の会議室、市内の貸室などの物件を求めて OB、横浜市勤務の卒業生などを訪ねて回りました。同時期に、工学部から山手線田町駅近くの東工大附属高校の場所を一緒に借りて、社会人教育を行わないかとの提案がありました。この時点では開設場所は全く白紙でしたが、YBS ブランド化に東京での開講は違和感が強く、教員の移動及び連絡にも不都合との考えから独断でお断りしました。当時は心が動きましたが、今では正解だったと思っています。

その後、横浜市役所の方々や三菱地所のご協力をいただき、MM 地区のランドマークタワー 18 階の 1 室を設置場所として借り受けることが出来ました。設置場所がサテライトキャンパスとして理想的な場所で決定され、肩の荷が下りた感じがしました。その後、カリキュラム（夜間主講義との負担調整を踏まえ）、サテライトキャンパスの設計、入試選抜方法が集中的に議論され、2004 年 2 月に入試が実施されました。

YBS 設置後、歴代経営学部長は夜間主の改組として、社会人教育を昼間主で実施できるような様々なプログラム及び制度変更などを工夫して取り組んで来ました。しかし周辺の夜間主授業を開講している大学数が減少し、かつ民主党政権交替により有職者の経営教育に夜間主の改組は受け入れられずに来ましたが、2017 年に夜間主学生の募集停止が決定しました。経営学部教員は授業負担が軽減され、YBS 教育にゆとりを持って貢献することが可能になりました。

3. 今後の YBS への期待

YBS 設置段階ではマネジメント専修コース 6 名、ファイナンス・アカウンティング専攻コース 6 名と 12 名の定員増となりました。YBS 卒業生は更に経営学理論の学びを深めるために博士課程後期への入学者増加に貢献しています。また、今後の YBS グローバル化のために国際認証を獲得して欲しいと思います。

横浜国大社会科学系 4つの大学院設置の思い出

横浜国立大学・放送大学

名誉教授 來生 新

私は1975年4月に横浜国立大学の経済学部にも助教授として採用され、2009年3月に退職し放送大学に移籍するまでの34年間、横浜国立大学で研究者・教員として過ごしました。

法律学を専門とする私が経済学部にも採用されたのは、経済学部にも「経済法学科」の設置が進行中だったからです。経済法学科の設置は、私が国大に入った時にはすでに先輩の諸先生の手でルートに乗っており、翌76年4月には正式に学科が発足しました。

当時、全国の二期校で法学部を設置するという動きがあり、世間からは、できるとすれば、横浜だろうと思われていました。しかし、現在も法学部はできておらず、その代わりに、今日に至るまでの過程で、大学院修士課程「国際経済法学研究科」、博士課程「国際開発研究科」、「国際社会科学研究科」ができ、その後国際経済法学研究科の中に「法科大学院」が設置されたことはご存じのとおりです。残念なことに、法科大学院は、今は廃止されています。

横浜国大の法学系の研究教育は、学部を持たず、大学院の修士課程と博士課程で行われるという、他に例のないものとなっています。私は上記の3つの大学院設置に直接かわり、新米教員として経済学部の経済法学科（修士課程）の立ち上げ直後の運営にも参加しました。

私が経済学部にも採用される以前の1972年には、経済学部と経営学部にも経済学研究科（修士）と経営学研究科（修士）が設置されていました。50年前、1975年は一期校、二期校の区別が厳然としてある時代でした。1949年に、戦前の神奈川師範、横浜高等商業、横浜高等工業が新制大学として合体し、横浜国立大学がスタートしてから25年。社会科学系の二期校のトップランナーが横浜国大の経済・経営両学部であったこともあり、経済・経営両学部からの法学部の独立は、両学部内でも大学全体としても、最優先の概算要求課題にはなり難い、微妙な組織課題でもありました。

その後、1990年、法学部ではなく、「国際経済法学研究科」が設置されました。経済法学科がすぐにも法学部になると思って就職してから15年、学部を持たない修士だけの独立研究科として、法律学の独立した研究・教育組織ができました。

横浜弁護士会と協力して法学部設置の努力を継続する中で、なかなか文部省が認めてくれず、経済学部にも属する公法系と経営学部にも属する私法系の法律系教員も、意気が上がらない日々が続いていました。そんな中で1987年の夏休みに、北海道大学の集中講義に出かけて札幌にいた時に、「文部省が法学部ではなく、新しい制度である学部を持たない独立研究科なら認める」ということで、会議をするからすぐ戻れと連絡が来て、翌日、渋谷にあった富丘会館に駆け付けたことを覚えています。80年代の日本は今の中国のような状況で、安定成長も終わり高齢化社会へ移行しようというタイミング。

私は、80年代を通じて、通産省産業組織政策室の主催する、日本への産業政策批判や貿易摩擦への対応に関する研究会に参加していました。当時のそのような時代状況を背景にして、比較的短期間で、新大学院のコンセプトを、「国際的な経済紛争の事前回避という予防法学的な教育研究を中心に、内外

の社会人に、日本人には外国の、外国人には日本の法制を教育する大学院」とすること、名称を「国際経済法学研究科（国経法）」とすることで、経済経営両学部法律系、政治学系の教員がまとまりました。

伝統的な法学教育が、紛争の事後解決手段としての法の機能の教育を中心とするのに対し、国際経済紛争の事前の回避という新規性を打ち出したことが、新たな制度である独立大学院にふさわしいと評価され、他大学のその後の社会人再教育制度構築のモデルになったと自負しています。

その後、国経法の「国際関係法専攻」に、日本の大学では教育研究体制が整っていなかった ODA に関する教育・研究を行うために、「国際開発コース」が設けられ、それが核になり 1994 年に社会科学系の経済、経営、法律が一体となった博士課程大学院である「国際開発研究科」が設置されました。ともに横浜高商を母体とし対抗意識が強かった経済学部と経営学部が、国経法の ODA 教育を媒介に、3 組織協同で博士課程大学院の設置に成功した。これは横浜国立大学の社会科学系の歴史にとって大きな出来事だったと思います。両学部に分属していた国経法の教員が、両学部の再融合に触媒としてご恩返しことができました。1999 年、国際開発研究科は国際社会科学研究科に改組されています。

最後の 4 つ目の大学院設置とのかかわりは、2004 年、国経法の経済関係法専攻を廃止し、専門職学位課程（法科大学院）（いわゆるロースクール）の「法曹実務専攻」を設置したことです。法学部の設置のために横浜弁護士会と交流を続けてきたことが、全国で唯一の法学部を持たない法科大学院の設置に大いに役立ちました。実務家教員の採用が法科大学院設置の要件だったためです。

国経法の設置の後に、私は国際開発研究科長、国際社会科学研究科長、副学長を経験し、教員としてまた大学の管理職として 3 つの大学院設置に深くかかわることができました。新制大学の二期校と旧帝大一期校との間にある、文科省の扱いの違いをどう克服し、教育研究組織の大学院化を実現するかが一貫した基本的な課題でした。

たくさんの優秀な先輩や同僚後輩に教えられ、支えられて得た教訓は、時代の状況にあった自らの特色を生かして、マイナスをプラスに転ずる革新的発想が世の中の仕組みを変える原動力だということです。

2009 年に放送大学に転じ、副学長や学長としていくつかの改革に取り組むことができたのも、横浜国大での経験によるところが非常に大きいと思っています。横浜国立大学の今後の益々のご発展を祈念しております。

次の100年に向けた、「不易」と「流行」

経済学部 2013 年卒

大野 周一

振り返ると、私の大学生活は人と機会に恵まれた4年間でした。

漠然と経済学に関心を持ち入学した私が、学問としての世界の広さを知り、知識にとどまらず思考力を習得できたことは、現在のキャリアにも活きるかけがえのない経験でした。

大学生活の中でも特に印象に残っているのは、ゼミ活動です。サークルの先輩の紹介で邊ゼミ（邊英治先生）に入りましたが、先生の渡英により西川ゼミ（西川輝先生）に引き継いでいただき、限られた学生生活の中で2つのゼミに入るという稀有な経験ができました。

邊ゼミでは、他大学との合同ゼミでのディベートで、ソニーとアップルのビジネスモデル比較を行ったことが忘れられません。アップルの iTunes が音楽ビジネスの市場を大きく転換する中、私たち邊ゼミメンバーはソニーの優位性を主張するため、文献やアンケートを集め、さらに私はソニー歴史館を訪れ、現地現物主義で発表を行いました。圧倒的不利な状況でもロジックを構築し、主張する力を身に着けることができたと今でも思い返します。

西川ゼミでは後輩にも恵まれました。毎週のゼミでのディスカッションが、心理的安全性のある環境づくりや多様な考えを受け入れ組織全体としてのアウトプットを高めるトレーニングとなりました。

ともに、経済学という軸のなかで、理論だけでなく人間力を磨く貴重な経験の日々であり、今の社会人生活の礎となっています。

こうした機会を得られたのは、面倒見の良い先生方と、個性的な先輩、ともに刺激しあった同期、気兼ねなくコミュニケーションをとってくれた後輩に恵まれたからこそです。特に、ゼミ同期の廣田さんや石亀さんとは、社会人になった今なお交友をもたせてもらっています。

こうした機会をいただいた横浜国立大学経済学部が100周年という大きな節目を迎えたことは、一人のOBとしても大変嬉しいです。私が勤務する日系企業も経済学部と同様に長い歴史を持ちますが、100周年のタイミングで経営者が社員に贈った言葉に「不易」と「流行」がありました。この言葉は、企業だけでなく大学においても共通する大切な考え方だと感じています。

「不易」とは、変えてはいけないもの、つまりその本質や価値を守り続けることです。私が勤める企業では、創業以来の経営理念が言葉を変えながらも脈々と受け継がれ、変化の激しい今の時代こそ企業としてのパーパスとコアバリューの実践による企業カルチャーを大切にし、成長しています。日本では従来の高品質・大量生産の製造業主体の経済構造が移り変わり、多様な人材が活躍しイノベーションを生み出せるよう転換する企業が増えています。属性や価値観が多様な社員のベクトルを1つにするためにもパーパス・コアバリューの重要性は高まっており、これがまさに「不易」といえます。

経済学部においては、横浜国立大学憲章の掲げる実践性・先進性・開放性・国際性・多様性の下、3つのポリシーを定めていますが、これらは国際貿易港・横浜での歴史と横浜高商以来の伝統を背景に脈々と築き上げてきたものを言語化したものであり、そのポリシーを守り続け、学部に関わるすべての人が

体現することが、大学のアイデンティティを確立するのに不可欠と考えます。今後も、この「不易」を大切に、先生や学生、OB・OG、地域などが更なる連帯感を育みながら、確固たる学問の場を提供してほしいと願います。

一方で、「流行」とは、時代の変化に応じて変えていくべきもののことです。私が卒業してから十余年経ちますが、卒業当時では想像できない社会に変化しており、テクノロジーの進化はさらにスピードを増しています。このような社会の中で、社会より遅い変化の企業は取り残され、選ばれない存在になってしまいます。

同様に、教育の現場も適応し変わり続けなければなりません。加えて、社会における経済活動を学ぶ本学部であれば、その変化のスピードは社会と同じかそれ以上の速さが求められるはずです。これまでの教育スタイルだけにとらわれず、新しい知識の獲得や実践力を養うための柔軟なアプローチを導入し、学生たちがさまざまなチャンスを楽しむ環境を整えてほしいと強く思います。

これまでの100年間、多くの優れた人材がこの大学で育ち社会で活躍していますが、それは教授陣の素晴らしい指導や、学生同士での出会いと切磋琢磨する機会があったからでしょう。私自身、4年間の学生生活では書ききれないほどの思い出があり、今の私を形作る礎になっています。これからも、私のように恵まれた学生が1人でも多く育つ場であってほしいです。そのためには、先生方が持つ豊富な経験や知見をさらに広め、現役の学生に限らず卒業生たちと連携を深めながら、多様な学びの機会を創出していくことが不可欠です。

現在、社会人の学び（リスキリング）の重要性は過去にないほど高まっています。特に、AIなど最新テクノロジーとともに、問題解決力のような思考力を体系的に学び実践力を向上することが求められています。こうした力を身に着けるには、企業の中での実践だけでは限界があり、多様な人材との交流やアカデミックな知識の習得により、体系立てて学ぶことが必要であり、大学はその役割を担える貴重な場であると考えます。

従来の産学連携は学生の就職、企業から見れば人材獲得を目的とした一方通行の形にとどまっていた。しかしこれからは、ビジネス経験を持つ社会人が実践力を高めるために改めて大学で学び、双方向の連携が実現することを望んでいます。企業と大学が一体となって取り組むことで、より実践的で価値のある教育や高いレベルの研究を実現できると考えています。

母校がこれからの100年を迎えるにあたり、「不易」と「流行」を大切に、次なる100年に向けて活躍の場を広げていくことを期待しています。そして、産学連携の取り組みがさらに進むことで、学生たちがより充実した学びを得られる環境が整備され、新たな時代を切り拓く人材が育つことを願っています。

改めて、母校の100周年を祝福するとともに、今後のさらなる発展を心から祈念いたします。

「横国で良かった」と思った出来事

経済学部 2015 年卒

ジョ セヨン

横浜国立大学 100 周年記念誌の発刊、誠におめでとうございます。お祝いの言葉をお届けできること嬉しい限りです。

改めまして、セヨンと申します。社会の各所でご活躍されている先輩・後輩の方々からの寄稿と、まだ未熟な私の文章が並べられると考えると、何を書くか悩みが絶えませんでした。今日は、素直に「横国で良かった」と思った出来事について、書こうと思います。

私は、韓国で生まれ育ち、横国への学部生入学を機に日本に来ました。親元を離れ、国を離れ、横国で学問に勤しみながら、日本という新しい社会で色々なことを学ばせていただきました。生まれ育った場所では当然と思ったものが当然ではない、違う社会を見ました。卒業後も、戦略コンサル、GAFA、資産運用業など業界を跨ぐ転職を重ね、多様な組織を見てきています。一貫して思うのは、個々の組織には、明文化されない行動様式、文化があるということです。大きくは社会、組織、小さくはお友達のグループまでにおいても、個々の人は大事な役割を果たしますが、それよりも積み重ねた時間が作り上げた仕組み、なんとなくやり続けていること、なんとなく使い続けている言葉などが、密かに物事を動かしていると思います。私が「横国で良かった」と感じたのは、このような言葉では表現しきれない、文化というところにあります。

最近、区役所での出来事です。

「それでは、こちらで転入のお手続きをしますので、後ろのお席にお座りになってお待ちください。」

その職員の言葉で窓口から離れベンチに座りながら、ふっと疑問が浮かびました。

今まで役所で敬語で対応されたことがあったかと。大したことではないかもしれませんが、今までの役所での経験は、身分証を出した瞬間に全員タメ語に変わってました。待っている間、ずっと考えました。そういえば、運転免許交付の際は、他の人と勘違いされた職員に、いきなり「あっちで待ってろつってるじゃん」と怒鳴られ、事情が分かった後も特に謝られることはなかった。そこからずっと考えると、社会人になってから、違う扱いをされると感じたことは色々ありました。過去の勤め先では、管理職の人が「どうせ国に帰る外国人を昇進させる必要はない、昇進枠の無駄」と熱弁をしていたり。

卒業からの約 10 年間の出来事を思い返している間、また呼ばれました。私は、職員さんにこう言いました。

「あの、どうでもいい話かもしれないんですけど、今日、普通に接していただいてありがとうございます、お伝えしたくて、」職員さんは、困惑した顔を浮かべました。

淡々とお礼を伝えて帰るつもりだったのが、震えてくる声を感じました。職業柄からしても、私は雄弁な方だと思っていたので、自分でもびっくりしました。なぜか、拙い言葉を喉から絞り出すかのように、「私、日本に 14 年ぐらい住んでるです。初めてなんです、役所で最初から最後まで敬語で対応されたのは。。普通の対応をしてくれてありがとうございます。」視野がぼやけてくることを感じました。私

は、急いで瞬きをしながら、職員さんを見つめお礼を言いました。

毅然として生きているつもりでした。社会人になってからは、「外の人」として扱われると感じ続けていても、流してこれていたと思ってました。しかし、自分でも驚くぐらい、大学卒業後から接している集団から受け取った何ものかは、私の中に溜まっていたようでした。「大学時代はそんなことを感じたことなかったのに」と思いました。

しかし、よく考えてみると、それは間違いです。大学時代でも、大学の外に出ると、そんな対応されることなんで、数えきれないほどあったことを思い出します。ただ、そのようなことがあっても、受け取った負の何かは、私の中に留まることなく、流れて消えていたと思います。だからこそ、在学時には、卒業後日本に残ることにおいても迷いがなかったわけなのです。ところで、社会人になってからの私は、どうか海外に出られる仕事の機会、ここを抜け出せる機会ばかりを探していました。

お祝いの言葉を寄せる場で、外国人差別だの、不公平だの、水を差すような言葉を述べるつもりはございません。この役所での、大学卒業以来初めて普通に接して頂いた経験を通じて、自分が横国で一構成員として普通に受け入れられていたと実感したことを伝えたいのです。自分の出身について負に思うこともなく、属性の違いを認識もせず、過ごせていた大学生活でした。そのような大学生活が送れたのは、留学生の定着のために横国の教職員の皆様が作って来ている支援制度やその運営、なんとなくみんなで混ざってやっている行事、なんとなくやってきている全てが背景にあったと思います。月並みな表現を借りると、多様性を包容する文化が横国にはあったというところでしょうか。

100年間、横国を通り去った全ての人による「なんとなく、普通に」が作り上げた包容性が、今も密かに常盤台キャンパスで次世代育てていると、私は信じています。100周年おめでとうございます。これからもますますのご発展を心よりお祈りしております。

横浜国立大学での9年間の思い出

経営学部 2016 年卒

宗像 智仁

私は学部生から博士課程後期までの9年間を、この横浜国立大学で過ごした。4年で卒業した学部の同級生たちの倍以上の期間通い続けたが、指導教員の高橋賢先生をはじめとした先生方や学友たちに恵まれ、そして故郷の東北に住む母の支えのおかげで、充実した学生生活を送ることができた。今回、社会科学系の部局が100周年を迎えるということで、学部から大学院まで同局で過ごした私の思い出を振り返っていく。

学部生時代、経営学部経営学科の中で、当時開かれていた夜間主コースに私は所属していた。本来、私は昼間主コースに進学を希望していたが、センター試験での点数が足りず、それでも横浜国立大学に進学したいという思いで選んだ進路であった。入学当初は昼間主コースに入ることができなかったことをコンプレックスに感じており、キャンパスを歩くほかの大学生と自分は違うのではないかと、大学生活にうまく馴染めずにいた。しかし、夜間主コースの級友たちの存在が、そうした私の考えを変えるきっかけとなってくれた。夜間主コースは授業が夕方から始まるため、さまざまなバックグラウンドを持つ学生がいた。仕事を一度辞め、学び直すことを目指した50歳の学生や、キャリアアップのために寝る時間を惜しんで、昼間は仕事をし、夜は授業という仕事と学業を両立させる30歳の学生など、昼間は授業を受けられない事情を抱える学生が多くいた。彼らと同じ教室で学び、彼らの考え方に触れることができたことは、私のその後の進路選択に大きな影響を与えている。社会を知らない当時の自分にとって、社会を知った学生が、隣で貴重なプライベートの時間を犠牲にしながらも勉学に励む姿は、もし昼間主コースに進学していたら、簡単には得ることができなかった経験であろう。

また、夜間主コースに進学したことは、経済面でも助けられることが多かった。当時の夜間主コースの授業料は、昼間主コースのおよそ半分であった。それにもかかわらず授業は昼間主コースと同等の質が担保されていた。夕方から始まり夜遅くに終わり、授業料が半分にもかかわらず、非常に質の高い授業を受ける機会をくださった先生方には感謝している。

当初、私は学部を卒業後、地元に戻ることを考えていた。しかし、希望の企業から内々定をいただき、就職活動を終えた4年生の8月に、急遽大学院進学へと進路を変更した。きっかけは、就職活動を通して改めて自分に向き合ったことであったが、決め手は学部時代から指導教員としてお世話になっている高橋賢先生が存在であった。大学院進学を決めたあとは卒業旅行にも行かず、大学院入試に向けて、ひたすら大学の中央図書館や資料室に通う毎日であった。8月はすでに大学院入試が終わってしまっていたため、2月に行われる追加募集の大学院入試を目指して勉強に励んだ。進路変更を決めた時点で内々定先には断りの連絡をしていたため、進路未定のまま4年生の2月を迎えることは精神的にも辛かったが、無事合格し大学院進学を決めることができた。

大学院進学後は、それまでの学部の夜間主コースとはまったく違う世界が待っていた。博士課程前期に進学した当時、同級生はおよそ40人程度いたが、そのうち日本人の学生は10人にも満たず、ほとん

どが中国出身の学生であった。大学院生になると、研究室として大部屋が利用できるようになるが、研究室やそこまで向かうエレベーターのなかでは、日本語以外の言語が飛び交っており、毎日が海外にいるような気分であった。博士課程後期では、今度は同級生が2人になり、しかもその2人は社会人大学院生ということで、会う機会も少なく、分野も異なっていたため、授業のほとんどは先生とマンツーマンという状況であった。

そして大学院から始まった研究生生活は想像以上であった。私自身が大学院生活というものを甘く見ていた面もあった。学部時代とは比べものにならないほどの速さ、量で進んでいく授業やゼミは、自分の不出来さを顧みる暇もなく、特に博士課程後期は毎日が本当の意味で自分との戦いだった。しかし、そうしたなかでも自分の支えとなったのは周りの人たちの存在であった。博士課程前期のときは、同じ高橋ゼミに所属していた2人の留学生は私を奮い立たせる存在となっていた。「日本で頑張っている彼女らの前で、私が弱音を吐いていられない」と何度も勇気づけられた。博士課程後期のときは、同級生との交流はあまりなかったものの、代わりに2人の先輩に気にかけていただき、私の心の拠り所をつくっていただいた。

そんな大学院生活だったが、Covid-19の影響で博士課程後期の最終年度はほぼすべてオンラインで終わってしまったことが唯一の心残りである。最終年度はほとんど大学に行くことができずに終わってしまったが、審査に関わっていただいた先生方にはオンラインでも、対面と変わらぬ手厚い指導をいただいた。特に指導教員の高橋先生にはオンラインで会話する機会を頻繁に設けていただいた。先生のあのサポートがなければ、私はあの1年を乗り越えることができなかった。高橋先生には感謝の念に堪えない。

夜間主コースの募集が停止し、私が在学した当時設定されていたコースがなくなるなど、時代のニーズに合わせ体制は変化しているが、社会科学系部局の根幹にある教育・研究への情熱は今も変わらないであろう。これからも時代にあわせる柔軟さと、変わらぬ情熱を持ち続け、社会科学の未来の一端を担う存在であり続けることを信じてやまない。

横浜国立大学経営学部での学生生活の回想

経営学部 2020 年卒

濱野 奏

2016年に横浜国立大学経営学部国際経営学科に入学し2020年3月に卒業してから、今年で5年になる。現在に至るまで、なかなか大学生生活を振り返ることもなかったが、改めて振り返ってみようと思う。

2016年春、大学生生活に心躍らせながら横浜国立大学の校門を通ったことを思い出す。まず驚いたのが、学内の緑の豊かさと広さである。元ゴルフ場と噂に聞くだけあって、緑が生い茂りリスなどの野生動物も見受けられた。また、理系学部と文系学部、さらには大学院も同じ敷地内にあることもあり、一体どこまで行けば教室にたどりつけるのかと思うような広さであった。授業については、必修科目に加えて自分で選択する必要がある、何に興味があるのか・何を学んでみたいのか、そんなことを考えながら先輩方や学友に相談し、履修選択をしたことを覚えている。

高校時代に英語コミュニケーションに興味があったこともあり国際経営学科を選択したが、たくさんの授業を受ける中で最も興味を抱いたのが人的資源管理であった。現在でこそ多くのメディアで取りざたされているダイバーシティ&インクルージョンであるが、当時議論の中心にあるのはダイバーシティの部分メインであったように記憶している。そのような環境の中で、二神教授のダイバーシティ&インクルージョンの講義を受け、非常に感銘を受けたのを覚えている。ダイバーシティ&インクルージョンの本質とは何なのか・今社会で求められていることは何なのか・それに対する現状や企業の取り組みはどのようなものがあるのか、そのようなことをより深く学んでみたいと思い、二神ゼミナールに入会した。

二神ゼミナールでは、同学年だけではなく、上級生・大学院生とゼミナールで同じ時間を過ごすことで、活発な意見交換をすることができ、様々な意見を吸収し自分の考えを広げることができたと感じる。ダイバーシティ&インクルージョンの基礎を学ぶだけではなく、実際の事例がどうなのか・どのような経験を経てその結果に至ったのか・現在はどのように動いているのか、などを体系的に学ぶことで、これからのあるべき姿はどのようなものなのかを考え、そこにたどり着くためにはどのような取り組みが必要なのかをディスカッションし学びを深めることができた。二神ゼミナールでの学びは、自分のキャリアの中で会社にどのように貢献していきたいかを考えたときに、その目標の一つとしてダイバーシティ&インクルージョンの伸長があるように、社会人になって働く現在でも私の中に深く残っている。

また、大学生活の中でもう一つの大きな存在であったのがサークル活動である。サークルの同期・先輩・後輩とは、社会人になった今でも定期的に会うなど交流が続いている。一緒に履修登録を考えたことやテスト勉強に励んだこと、悩みを相談したり喜びを分かち合ったりと多くの時間を共に過ごしてきたことは、私の大学生活での大きな思い出の一つである。経営学部はクラスがないこともあり、授業を受けるにしても固定的に一緒にいるメンバーはいなかった。そんな中で、どこかの組織に所属しているということは、地方から進学した私にとって安心材料であった。何か困ったことがあったときや相談したいことがあるとき、すぐに声をかけることができる存在が身近にいたことで、深く思い悩むこともな

く、楽しく日々を送れたと思っている。私の卒業直前、コロナウイルスが蔓延しはじめ、2021年以降はなかなかサークル活動を継続することが難しかったと聞いている。そんな中でもサークルのつながりを絶やすことなく、先日50周年を迎えることができた。年代を超えて現在でもつながりを絶やすことなく継続できていることは、大学生と社会人が交流する場の創出であると同時に、学生時代に思いを馳せることができる貴重な機会であると感じる。

大学生活のなかでの最も大きなイベントが就職活動だったのではないだろうか。自分がこれから社会に出て何を生業にして生きていくのか、大きな決断が迫られる時期であった。自分はどのような人間でどのような思考を持っているのか、何が強みで何が弱みなのか、など今までしっかりと向き合うことの少なかった自分自身と向き合うことで、自分のありたい姿や目標を見つけることができた。高校生から大学生になり社会人になっていく中で、どのような思考の変化があったのか見つめなおしたあの時間は大切な時間であったと今でも感じる。就職活動を経て様々な企業や仕事を知ることができたのも良い経験だった。様々な働き方や制度を調べることで、当時勉強していたダイバーシティ&インクルージョンに対する見識もより深めることができた。

大学生活について回想してみたが、本当に楽しかったことばかり思い返される。横浜国立大学に進学していなければ、今とは違った人生になっていたと思うことがよくある。そのくらい、横浜国立大学で学んだことや出会った仲間は非常に重要なものである。

最後に、百年史の記事執筆という貴重な機会をくださった経営学部国際経営学科二神教授ならびに関係者の皆様に感謝の意を表すとともに、横浜国立大学の益々のご繁栄を祈り、締めくくりとさせていただく。

横浜国立大学国際社会科学府・研究院に吹く風

法曹実務専攻 2006 年卒

藤田 香織

私が横浜国立大学国際社会科学府研究科法曹実務専攻、いわゆるロースクールに入学したのは、ロースクール制度が開始されたその年である 2004 年 4 月であった。法学部卒業生を対象とした既習コースは、2 年のカリキュラムが組まれており、ロースクールを卒業すれば司法試験の受験資格を得ることとなる。

横浜国立大学ロースクールの既習コースは私を含めて 11 名であった。また、メンバーも、行政庁からの出向という形で入学した者、勤務経験がある者、司法試験受験を続けてきた者、主婦であった者など、バックグラウンドも年齢もばらばらで、私たちをつなぐものは、これから法学を学んで司法試験を受けるという志だけだった。

教員にとっても、初めてのロースクールの学生に戸惑うことも多かったと思う。我々はロースクールで司法試験受験科目である刑事、憲法、刑法、民法、刑事訴訟法、民事訴訟法、商法、行政法に加えて、著作権法や労働法などの選択科目をまんべんなく学ぶ必要性があったが、このように、一つの分野の学問を突き詰めるのではなく、まんべんなく多くの法分野を学ぶ学生を教えることは初めてだったのではないか。それでも我々のことを信頼し、修士の学生を教えるように、自身の専門的知識を教授してくださった先生方には本当に感謝している。課題や発表に、寝る間を惜しんで取組み、とうとう入院してしまった同級生がいたことをきっかけに、教員同士でそれぞれがどのような課題を課しているかの情報共有をしていただき、なんとか睡眠時間が確保できるようになった。それでも、可能な限りの予習や準備をし、容赦の無い同級生や教員の先生からの質問に答え、時に熱くなりすぎるほどの議論をし、新しく出てきた疑問を文献で調べるために図書館まで先を争うように走ったことは、今でも昨日のことのよう

に思い出す。

司法試験の科目は多分野にわたるため、民法の授業を受けている間に民事訴訟法についての派生論点を見つけ、議論になったり、民法の因果関係と刑法の因果関係の違いについて疑問を持ったりという、学際的な質問をすることも多かった。怖い物知らずの我々は、民法の教員に質問に行き、民法の教員と一緒に民事訴訟法の教員の執務室を訪れて 2 人の教員に同時に質問をすることもあった。他分野の教員同士がそれぞれの考え方の違いを我々に示してくれたり、時に熱い議論を交わすのを見学しながら、法学という学問の奥深さや面白さを学んでいったように思う。

横浜国立大学ロースクールには、弁護士や検察官、裁判官の実務家教員も教鞭をとられており、特に私たちが楽しみにしていた授業は、実務家教員と研究者教員が同時に教壇に立つ、実務科目であった。実際の事件をもとに、実務家の視点、研究者の視点からそれぞれ法的な議論が交わされ、それぞれの分野で多くの経験を積んだ専門家が様々な視点から我々に法的な考え方を示して下さる授業時間は、実に貴重な時間であった。ときに「それでは理論が成り立たない」「それでは守られるべき者が守られない」と、教員同士で激しい議論が戦わされることがあったが、このような議論を聞く機会があったのはその後の実務家としての活動にとっても、得がたい経験であった。

我々最初の卒業生は、全員が司法試験に受かり、実務家として多くの経験を積んできたが、ロースクール時代に培った法的な考え方、調査の方法、議論の仕方はいまでも我々の血肉となっている。あのときに全力で、ご自身の時間を削っても熱心に教えてくださった恩師ら、自由闊達な議論がどこでも守られた横浜国立大学ロースクールの校風がなければ、今の私はないだろう。

弁護士数年目が経過した頃、恩師の一人から、ロースクールで実務家教員として教えてみないかとの打診があった。あの頃の実務家教員のような実務経験も能力も無かったが、当時、司法試験受験生がアカデミックな議論を避けがちだということを聞き、ロースクールでのアカデミックな教育こそが力のある実務家を育てるのだと伝えるために、実務家教員として出来ることがあるのではないかと考え、ゼミや実務科目等を受け持った。研究者教員のように完成された授業は出来なかったかもしれないが、勉強方法に悩む受験生に、正攻法の勉強に意味があることを伝えることは出来たのではないかとおもう。ゼミをしながら、私の薄い知識では十分に学生に説明が出来ないと思うと、昔のように学生と一緒に研究者教員の研究室を訪れ、教えを請い、時に議論に巻き込んだが、やはりあの頃と同じく、横浜国大の研究者教員は議論や質問にオープンで、学際的な議論を時間をかけてして下さった。

ロースクール自体はその後廃止されてしまったが、現在、神奈川弁護士会の副会長として、横浜国立大学との交流の担当をしていると、やはりあの頃と変わらない、学問に対する熱心さや、外から来る風へのオープンさ、研究職ではない者にたいしてもリスペクトを持って話をしてくださる寛容さを感じる。

国際的に活躍の場を広く持ちながらも、地域に根ざし、対外的にオープンな横浜国立大学国際社会科学府が、これからも200年、1000年と続いていくことを強く願う。

横浜国立大学と私

経済学部 1966 年卒

亀崎 英敏

私は 62 年前の 1962 年 4 月横浜国立大学経済学部に入學した。

81 歳の今振り返ってみると、清水ヶ丘の白亜の殿堂で過ごした 4 年間が私の人生の起点であり、最もかけがえのない意義深い特別な時間であったとしみじみ思う。

当時の国大は経済・工学・学芸の 3 学部のみで、経済は一学年 170 人前後と少数であった。復帰前の沖縄を始め全国各地から集まった先輩や同期諸君との出会いは大変新鮮且つ刺激的であった。又、福岡県南部の田舎で 18 年間を過ごした私にとって、三ッ沢中町で始めた一人生活は全てが新しいスタートであった。母校山門高校の同期 10 数人が九州大学に入學する中、同校からの初めての国大入學生となった私は、間借りの机の前の壁に“我志を立て離郷、学もし成らずんば死すとも帰らず”と自ら書いた書を張って 4 年間に向かう決意を新たにした。とは言え何が学かは定かに見えないスタートでもあった。

当時の経済学部は、黒澤清・越村信三郎・沼田嘉穂・長洲一二・宮崎義一等に代表される著名な教授陣を擁すると同時に、少数精鋭のゼミを実施するというマンモス大学とは違った特徴を有していた。講義は何れも新鮮で最高学府に來たのだという感激の一方で直ぐには消化しきれない難解さも感じた。その中で長洲先生のお話は洗練された言語とシャープな見解に満ちあふれ、目の前が明るく広がるような知的ショックを覚え“国大に來て良かった”とつくづく魅了された。この知的ショックが後刻長洲ゼミに入る動機となった。一方、サークル活動は社研や新聞会などはとっつき難く感じたのに比べ、中学時代から好きだった英語のサークルが English Studying (Speaking ではなく) Society と表現していたことも気に入って ESS へ入部を決定した。こうして私の目標とする学は長洲ゼミと ESS の活動に狙いを定めることにした。

長洲ゼミではマルクスの資本論の読解が中心であったが、どこまで理解出来たか残念ながら自信がないのが正直なところだ。一方ゼミ活動を通じてゼミナリストンとの交流が深まり刺激を受けたことは大きな収穫であった。ESS では学内活動及び米人宅での会話の他、放課後一人で山下公園に出かけ、出身国の違う多くの外国人に直接話しかける手法で生の会話が出来ると喜びを覚え継続することを習慣にした。又、スピーチ・ディベート・ドラマと幅広く活動が続ける中、大学 4 年の春には全国大学英語ディベート大会に同期の岩永誠・北村和夫・高柳敏明諸氏と共に出場し準優勝、その年の冬には第 10 回高松宮杯全国大学英語弁論大会で優勝を果たすことが出来た。尚、その 2 年後同じ長洲ゼミ・ESS の後輩塚越至君が同じ高松宮杯大会で優勝している。

1966 年卒業と同時に三菱商事に入社、その後ベルリン・ニューヨーク・台北等の駐在を経て常務に就任、2007 年副社長在任時に政府からの要請で日本銀行審議委員に就任し日本の金融政策に従事した。5 年間の任期を終えた直後の 2012 年には APEC ビジネス諮問委員会 (ABAC) 日本委員の任命を受け、2017 年迄活動が続けた。この間、五大陸約 100 ヶ国を訪れたが、学生時代に培った英語力が大いに役立った。特に ABAC での活動は年 4 回実施される国際会議が主体であり、ESS 活動でのディベートの体験

を活かすことが出来た。

卒業後も母校への思いは強く、三菱商事での富丘会、日本銀行と三菱商事の合同富丘会開催の他、国大卒業生で構成する“国大会”を結成し、約10年間に亘って交流会を実施した。この交流会は新聞の人事欄に掲載される国大出身者の会社役員に都度私が直接電話をかけ、参加を呼びかけ続け、徐々に会員数が増加し、会の名称が亀崎会となった。

手許にある2013年7月時点のメンバーリストでは総勢28名、飯島彰己三井物産社長（74 営）・川畑茂樹東京海上日動あんしんコンサルティング社長（74 済）・石塚哲士シーアイ化成社長（75 済）・藁科至徳シーティシー・ラボラトリーシステムズ社長（75 済）・加留部淳豊田通商社長（76 工）・日下部聡経済産業省大臣官房（82 済、後に資源エネルギー庁長官）・辻慎吾森ビル社長（83 工）等々全員が企業等の経営者の方々であった。

又、この他、母校との種々の関わりを持つことが出来ていることを大変嬉しく思う。具体的には、富丘会理事・副理事長・評議員を歴任、その後8年間（長谷部学長任期6年に続き梅原学長時の2年）に亘る経営協議会／学長選考会議・監察会議委員を務めた。又、現役学生との関わりは、2003年に始まった連携講義の講師として初回より欠かさず今年まで登壇し、“一歩出る勇気と持続する努力”の大切さを呼びかけてきた。こうした中、2021年に第8回YNUプラウド卒業生にノミネートされる光栄に浴したことは望外の喜びである。

このように1962年に入学した母校横浜国立大学との長く深い関わりを、卒業して62年後の今なお続けることが出来ることに大きな喜びを感じている。

創立100周年にあたり、一卒業生として母校の今後の一層の発展を切に望んで止まない。

坂道と学生時代

経営学部 1975 年卒

石原 健一

入学時の大学は清水が丘であった。高校生の時に「ブルー・ライト・よこはま」、「よこはま・たそがれ」「伊勢佐木町ブルース」が流行り横浜に引き寄せられるような思いで横浜国立大学経営学部に入學した。当時学生運動が盛んで入学式は無かった。自宅より遠いので大学のすぐ傍にある「富士見寮」に入居することになった。最近、清水が丘を車で訪れたが結構な急勾配の丘であることを思い出した。ドンドン商店街で春夏用の掛布団を購入し、よく丘の上まで担いで帰ったものだ。1年、2年生と目いっぱい大学の講義は履修登録し、良く学んだつもりである。先生の都合で休講となった時は寮に帰って休息ができてとても便利であった。

大学の講義は新鮮で楽しいものが多かった。今でも教えて頂いたことの多くが染みついている。まさに人としての教養の基礎となっている事に感謝したい。植生地理学の M 先生が意図的にデザインした樹木を植えても育たなく「様々な樹木を植えそこから生き残った木が森を作る」等印象的であった。「計画された新しい街ブラジリアよりその街を作るために労働者が住んだ町が発展した。」等を知ることによって新たな境地が開けた。第二外国語はこの先使えそうということで中国語を選択したが、教材が中華人民共和国のものであることに驚いた。中国語なので当然であると言えばそうであるが中国共産党の思想が背景にあり違和感を覚えた。「紅旗」中国共産党機関紙、新聞「人民日報」、そしてリスニング是北京放送の録音であった。彼らの思想に染まることはなかったが、どの様に物事を見ているのかよく分かった。日本軍の事は相当悪い書き方をされていた。

寮生活は平穏無事に過ぎた。汚い寮にある時、金髪青目のスウェーデンの男子学生が一人で来て泊ったことがある。誰の関係で何故彼が寮に来ることになったかは今では思い出せない。4人部屋で後輩と一緒に彼が持ってきた舶来ウイスキー1本を飲み拙い英語で音楽の事や色々な話をした記憶がある。今から思えばよく寮に泊まったものだ。一般の人から見ても相当汚い寮であった。清水が丘の校舎は「白亜の殿堂」と呼ばれ太いコンクリートの柱が下から上まで何本も通っている立派な外観であった。写真を結構撮った方だが不思議なことに校舎を撮ったカラー写真が一枚もない。今から思えば学生運動の立て看板等が多くあり写真を撮る気持ちになれなかったのが理由であったかもしれない。

寮生は学生運動している人が多く K 派の学生であった。ノンボリの学生にはそもそもどうして沖縄返還に反対するのかが分からなかった。K 派の委員長も寮でよく見かけたが寮生ではなかったと記憶する。ある時寮の先輩より勉強のためデモに参加するように勧められた。今回のデモは穏やかなデモとの説明であった。後学の為一回行ってみようと思い参加した。ヘルメットも何もないので先輩が貸してくれた。東京の W 大学に参集し集会後に地下鉄に乗り四谷駅で切符を駅員に投げるように渡し地上に出た。驚いた！既に交番が燃えており警察官が駆け回っていた。学生たちは所持品を投げ捨てて逃げた。ヘルメットを捨てたいと思ったが借りものなので捨てるわけにいかずコートで包み最終集会地の神宮外苑へ地下鉄で向かった。車中で周りの何人かに取り囲まれコートを開くよう要請された。刑事で

あった。コートを開くとき「捕まってしまった」との思いがよぎった。意外なことに逮捕されることはなく、刑事たちは期待外れの表情となった。火炎瓶を所持していると思っていたらしい。その後地下鉄をおり機動隊に挟まれ写真を撮られながら集会に参加した。終了後「さあ帰ろう」と思ったが帰り道は両側びっしり機動隊が囲み抜け出して帰れないことが分かった。大卒になる学生と高卒が多い機動隊との意識・感情を感じ取った。後日無事に先輩にヘルメットを返却することが出来ホッとした。ある明け方3時ごろ寮のガラス窓が割られて大騒動となった。K派と対立しているC派が寮を襲撃してきたのだ。2階の部屋の窓ガラスも割られた。K派の学生が4人部屋のファンシーケースに隠れた。C派が来て部屋を暗い床下まで隅々調べたがファンシーケースだけは捜さなかった。我々ノンポリ寮生も1階の玄関近くに並ばされK派の委員長がどこに隠れているか問い詰められた。その時バールで並ばされている板壁の頭の少し上を激しく何度も叩かれた。なんと並んでいる寮生の中にK派の委員長がいるので驚いた。20-30分時間が経ち外から引き上げの笛の音が聞こえてきた。やれ助かったと思ったその時、C派の一人がK派の委員長をじっくり見て「こいつは正門でビラを撒いていた」と言い出しK派委員長を連れ出そうとした。その時体を張って連れ出されそうになった委員長を助けた寮生がいた。なんとノンポリで学生運動にまったく興味がないガリ勉で有名な経済学部3年生であった。彼の抵抗で揉めているうち、再び引き上げの笛が鳴りC派は諦めて引き上げた。引き上げ後、K派の学生1名が食堂で殺害されているのが見つかった。学生運動で何故そこまでするのか理解できず、危険すぎるので退寮した。

産業界、特にメーカーに強いF教授のゼミに所属し職務分析等少数教育を受けた。先生の思いとは別の商社に就職することになった。正月に先生宅に伺い、社会人となっている先輩とお会いしたり、先生が収集している焼き物でお酒を頂いたり、自ら先生がリンゴの皮を剥いてくれたり有難い思い出となった。先生はMIT（マサチューセッツ工科大学）を引き合いに出し盛んにYNUと言われていた。確かに他の国立大学は頭文字が2文字で格好がつかず、その点YNUは収まりが良い。4年生の時に清水が丘より常盤台へ統合された。当時の常盤台は工事が終わったばかりで白いコンクリートの建物と土の印象が強かった。現在の緑は想像すらできない状況であった。横浜駅よりのバスは現在の岡沢町バス停ではなく、もっと先にあった記憶がある。運動場の方より国道1号線を跨ぐ橋を「真理を追求する者のみが渡ることが出来る」と粋がって渡ったことが思い起こされる。

YNUの学生を経験し、富丘会の事務局長を経験し大学との接点が増え、非常勤講師、キャリアアドバイザー、現在は校友会の事務局長を拝命している。校友会は大学とは別組織であるが大学の中で事務職の皆さんと同じように勤務しており大学の事がまた一つ分かった。YNUには未だに大変お世話になっている。社会科学系100周年、大学創基150周年 御目出とうございます！ YNUに栄光あれ！！

学生生活の回想と同窓会活動を通じて思うこと

経済学部 1978 年卒

宮田 芳文

私が、横浜国立大学に入学したのは、1975 年 4 月、京浜急行の南太田駅にある清水が丘校舎でした。まだ学生運動の面影が残る時代でした。入学式らしきものもなく機動隊が常駐していました。そんな中半年だけですが、長洲一二先生の授業を受け、この大学に入学できて良かったと感じることができました。

これから自分の考えを政治の世界で実践しようという情熱、慈愛に満ちた、生徒たちに語りかける先生の講義に感銘をうけ、そののち神奈川県知事に就任され、革新系の知事として活躍されました。この授業が最後かと思うと残念でなりませんでした。

半年で今の常盤台の校舎に移りました。私は経済史の遠藤輝明先生のゼミに入り、まずは原点である大塚久雄先生の「資本主義と共同体を考える」を勉強し、さらに仏語、英語で書かれた原書を読んで学びなさいと指導され、翻訳のない原書を最初に渡され悪戦苦闘いたしました。余り先生の期待には応えられなかったと思いますが。お酒が好きな方でゼミの先輩も含め様々な論点で議論する（時に朝まで）機会に恵まれ、一番勉強になりました。卒業を前にマックスウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の本当の意味を理解しなさいと言われたことが社会人として学びの原点になりました。今振り返ると多くの先生から薫陶をうけた恵まれた環境にいたと思いました。宮崎義一先生、岸本重陳先生、特に労働経済の神代和欣先生は、卒業後も様々な政策についてビジネスマンとしてどう感じているのか？意見を述べよと持論をぶつけてきて大変鍛えられました。何事にも研究熱心でゴルフも驚くほど上達されました。

卒業後、社会科学系の卒業生の同窓会富丘会に入会して素晴らしい先輩の皆さんから大いに学びました。まず日経新聞会長の杉田さん、三菱商事副社長の亀崎さん、ヤマハ会長の岸田さんはじめ、多くの方々の協力のもと、学生の皆さんに役立つことに注力してきました。①学生の就職対応で、面接指導の研修会②産業界で活躍する皆さんの連携講義③産業界の著名人を講師とした若手卒業生の交流勉強会④経済界で活躍している経済人の集い⑤横浜経営者の会による大学と横浜を基盤とする産業界との連携の構築⑥海外で実務経験のある皆さんによる連携講座等、数えればきりがありませんが、これはすべて、大学関係者や卒業生、学生の皆さんとの協力の賜物でした、心より感謝いたします。さらには理工学部や教育学部の同窓会の皆様と力を合わせ、大学や学生の皆さんのプレゼンス向上に向け努力を続けていき、社会科学部 100 周年の祝辞とします。

バブル期の学生生活とご縁

経営学部 1992 年卒

森川 紀代

1988 年、横浜港を臨むホールにて、横浜国大初の全学統一入学式が開催され、私は経営学部新入生の 1 人としてその場に座っていた。時はバブル景気の真っ只中。社会全体に、日本の永続的な経済発展を信じて疑わない、高揚感のようなものがあったと思う。そのような時代に送った学生生活を振り返る。

1. 大学生活のスタート

入学式に続く大学生活の中で記憶に残る最初の光景は、常盤台キャンパスのメインストリートで繰り広げられていた各部・各サークルの新入生勧誘である。同級生数名で歩いていたが、気が付くと、上級生達とともにボウリングをしていた（当時、正門前のバス停向かいにボウリング場があった）。ボウリング代も食事代も先輩方のおごりだったと思う。帰宅時は、赤いプレリウド（ホンダ車）で家の近くまで送ってもらった。その時の気持ちは憶えていないが、数週間前まで田舎の高校生だった私が、先輩方を眩しく感じたのは間違いないだろう。そのような歓待を受け、流されるままにユースホステル研究会に入った。このサークルでは、春と秋に小グループに分かれて各地のユースホステルに泊まる行事があるほか、ボウリング、カラオケ、飲み会、ドライブ、スキーと、自然発生的に様々なイベントがあり、毎日のように集まっては楽しく過ごした。ちなみに、バブル時代といえば「お立ち台」で扇を振り回す映像が象徴のようなのだが、そういった遊びとは縁がなく、夜の遊びはドライブが多かった。複数台の車で、時には数時間も車を走らせながら、ひたすらおしゃべりに興じたり、夜中に立入禁止場所（閉鎖されていた赤レンガ倉庫の敷地など）に入ったりした。携帯電話が無かったあの時代に、どうやって連絡をとりあっていただろうか、今となっては少し不思議に思ったりもするが、1つの連絡手段としては、1年生の秋にオープンした大学会館1階の溜まり場に行くことであり、行けば必ず誰かがいた。

2. 勉学と就職

成績はさほど悪くはなかったように思うが(客観的事実は不明)、勉強が二の次だったことは否めない。卒論も「やっつけ仕事」というほかないものだった。後に、二十代後半で仕事の傍ら司法試験の勉強に取り組んだが、その際に、「学生時代にこれぐらい真面目に勉強しておけば、もう少しマシな卒論が書けただろう」と思い、恩師である今泉敬忠教授（当時）に心の中でお詫びしたものである。

今泉ゼミといえば、紫煙に満ちたゼミ室の光景が蘇る。当時は、新幹線や航空機にも喫煙席があるなど、喫煙に寛容な社会であったため、その点に疑問を感じたことは無かったが、今泉先生がゼミに葉巻を持ってこられ、ゼミ生に勧めていたことは、記憶に残っている。今泉先生は、英国留学のご経験があり、パイプをくわえ、奥様を「ワイフ」とお呼びになっていた。私のそれまでの人生では出会ったこと

の無いハイカラなからだだった。

後に「バブル最後の世代」と言われる学年であり、大学4年生になって始めた就職活動も格別の苦労なく、「楽しそう」と感じた会社に就職を決め、システムエンジニアになった。システムエンジニアを志したわけではなく、正直なところ、仕事の内容は会社に入るまでよくわかっていなかった。

時は流れ、私は2001年に弁護士になり、現在では、いくつかの上場企業の社外役員（取締役、監査役）も務めている。変わり種の経歴であるが、今思うのは、無駄な経験は無いということ。大学で学んだ経営学や会計学などの知識は、弁護士や社外役員の様々な仕事の場面で役立っている。また、システムエンジニアとして得た経験を生かして、IT企業の顧問弁護士を務め、非常勤裁判官を務めた時期には多くのIT紛争に携わった。DXに明るい人材として役員候補に推していただいたりもする。

3. ご縁

最後に告白すると、横浜国大は第1志望では無かった。しかし、ここに入学しなければ得られなかったご縁が無数にあり、振り返ってみれば、本学へ入学したことは幸いであったと思う。例えば、初めて上場企業の役員に就任したのは、本学出身の先輩弁護士の推薦があつてのことである。同弁護士とは卒業年が20年近くも離れており、大学時代の接点はないが、富丘経済研究会を通じてご縁をいただいた。また、ある会合でお会いしたかたが偶然にも今泉ゼミの先輩であることがわかり、後に、その先輩から紹介いただいた企業には、現在も顧問契約を結んでいただいている。

学生時代、たくさんの時間を共有したユースホステル研究会の方々とは、今でも交流がある。初老といわれるような年齢になっても、先輩がたから「ちゃん」付けで呼ばれ、後輩として可愛がってもらっている。お会いすると、学生時代に戻ったような気持ちと言えは少し大袈裟かもしれないが、変わらない関係性の心地よさを感じ、また、ドライブに繰り出した日々を懐かしく思い出す。

多くのものを与えてくれた横浜国大には感謝しており、これからも、学生・卒業生の豊かな人生を育む礎となり、そして、素晴らしい縁が結ばれる場所であることを願っている。

100 周年に寄せて

—「ワーク・ライフ・バランス」を模索する日々—

大学院国際社会科学研究院

教授 藤生 源子

100 周年に寄せて教育・研究の回想を執筆することとなった。横浜国立大学経済学部に着任してから15年が経過し、100年という長い歴史の中では1/5にも満たないわずかな在籍期間であるが、着任時お腹の中に居た娘も今では高校一年生となった。着任以来、子育てと教育・研究の両立を目指しつつ、自分なりの「ワーク・ライフ・バランス」を模索する日々が続いている。ここ数年は、定期的に学術雑誌へ論文を掲載できるようになり、少しずつ研究成果を積み上げることが出来ている。これもひとえに、経済学部の同僚の先生方や事務職員の方々のご理解とご支援によるものであり深く感謝している。本稿では、自分なりの「ワーク・ライフ・バランス」の変遷について書いてみたい。

経済学には様々な分野があるが、その多くに共通する根本的な問いは、限られた資源をどう配分するかというものである。「ワーク・ライフ・バランス」は、まさにこの資源配分問題であり、子育て中の大学教員であれば、限られた時間を研究・教育・学内業務・子育て・家事全般にどう配分するかということになる。配分には、時間単位で考える短期的側面と、10年、20年といった長期的な側面がある。後者には、将来何が起こるか分からないという高い不確実性が伴う。私自身、着任直後からこうした事態に直面することとなった。

2008年10月、着任早々に切迫流産と診断され、経済学部の皆様には多大なるご迷惑をおかけすることとなった。秋学期が始まり、学部と大学院の1回目の授業を終えたばかりである。ぎりぎりまで働いて産休後はすぐに教育・研究に復帰するつもりで意気込んでいたので、予期せぬ事態となった。学期末まで授業を続けられないかと主治医に相談したが、とにかく絶対安静が必要であると厳しく叱られてしまった。着任したばかりで授業を放棄する形となり、やるせない気持ちで大学に連絡を入れた。履修学生への対応や代替教員の確保など、当時の教務担当の先生方や職員の皆様には多大なご負担をおかけしたに違いない。着任一年目は教育・研究ともに中断してしまい、申し訳ない思いを抱えながら過ごしていたが、当時学部長であった大門正克先生、赴任前からお世話になった秋山太郎先生や大森義明先生からいただいた温かい励ましの言葉に、どれほど救われたか忘れることができない。

翌年の春、無事に出産を迎えた。しかし当時は赴任1年未満では育休を取ることができず、産休後すぐに大学へ復帰することとなった。当時の横浜市は深刻な保育園不足で、競争率の高い0歳児クラスに翌年4月から入園させるためには、仕事復帰は有利な条件でもあった。2年後に息子を出産した際も、結局育休は取らず、無認可保育室や保育ママ制度を利用して乗り切った。しかし、子育てに追われる上、若手の頃は授業準備にも多くの時間を要し、ワーク・ライフ・バランス的には子育てと教育に時間を取られ、研究に集中できる時間がほとんど無かった。子供を預けてまで働いているのに、研究成果を出せず自己嫌悪に陥ることも多々あった。それでも、子供が小さい時期には委員会業務を軽減していただく

など、経済学部への配慮には本当に助けられた。ちょうどその頃、大学では男女共同参画推進室が中心となり、学内保育園の設置やシンポジウムの開催など、女性が働きやすい環境作りに取り組んでおり、推進室委員としてその活動に関わる機会を得たことは、大きな励みとなった。

息子が小学校に入学し、ようやく自分の研究に専念できる時間が取れると思っていた矢先、学部の入試広報委員会の委員長を務めることとなった。大学入学共通テストの導入を控え、全学的には入試検討WGが立ち上がり様々な議論に参加させていただいた。学部内ではAO入試の拡充や入試制度改革など、多岐にわたる業務に携わった。4年後には教務厚生委員長として、データサイエンス教育に特化したDSEPの立ち上げ、早期の専門性修得と5年一貫教育を可能としたEcon-ROUTEの導入に取り組んだ。これらの教育プログラムは、経済学部のソフト面での重要な資産であり、見直しを重ねながら強化し、優秀な人材を社会に輩出する基盤となれればと願っている。各種委員長などの学内業務は、時間的拘束や大きな責任を伴うが、学部運営について学ぶことができる貴重な経験だと思っている。

研究時間の確保の面では、コロナ禍を契機に、場所を選ばず打ち合わせができるZoomやクラウド上で論文を同時編集できるoverleafなどのツールが普及し、大きなプラスに働いた。リモートで議論できるようになり研究の効率性が格段に向上したと思う。特に、子供達が寝た後の限られた自分の時間を、共同研究という形で有効に活用出来ることは大きい。現在も毎週Zoomミーティングを行い、研究に欠かせない貴重な時間となっている。子供が居ると在外研究へ行くことも難しいが、このようなオンラインツールの活用は、地理的な制約を超えた共同研究を円滑にし、研究活動における新たなスタンダードになっていると思う。

2024年8月、エディンバラ大学での夏季語学研修に初めて引率教員として参加した。二人の子供達も中高生となり、子育ての面での時間的な制約が減少し自分に出来るならと引き受けた。同僚の先生方にも子育て中の方が多く、それぞれ研究・教育との両立を模索していると思う。「ワーク・ライフ・バランス」というと子育て中の女性への支援に偏りがちだが、男性女性問わず、さまざまなライフイベントに応じた柔軟な支援が重要である。私自身、周囲の理解やサポートの大切さを実感しており、その恩恵に感謝しながら、引き続き与えられた仕事に真摯に取り組んでいきたい。

100 年分の 30 年

大学院国際社会科学研究院

教授 原 俊雄

学生として

私は 1985 年に経営学部会計学科に入学した。当初は公認会計士を目指しており、当時、国立大学で会計学科があったのは本学、神戸大学、滋賀大学だけであったと記憶している。1 年次には、後に恩師となる大藪俊哉先生の「簿記原理」を履修した。大藪先生は沼田嘉穂先生の『簿記教科書』をテキストとして使用し、椅子に深く腰掛けて板書もほとんどせずに空で説明されていたため、あまり理解できなかった。今の時代であれば、授業アンケートで厳しい評価を受けてしまうかもしれないが、当時は自分の理解不足と考え、授業時間外学修として『簿記教科書 記帳練習帳』も購入し、記帳練習を行うことで何とか授業についていった。

学部時代、会計学科には若杉明先生、吉田彰先生、河野正男先生、吉川武男先生、山下正毅先生、濱本道正先生、溝口周二先生がいらっしゃったが、3 年次からのゼミは 1 年次にお世話になった大藪先生のゼミに入り、簿記および財務会計を学んだ。

4 年次に、当時一橋大学の大学院生であった大藪ゼミの先輩、泉宏之先生と出会ったことを機に研究者の道へ方向転換し、大学院経営学研究科修士課程に進学した。大学院時代は先輩方とも親交を深め、学生時代の最も楽しい 2 年間を過ごすことができた。修士課程の 2 年次には泉先生が着任され、大藪先生と泉先生から修士論文の指導を受けることができた。一橋大学大学院博士課程に編入学できたのはお二人に負うところが大きい。かくして、学部・大学院を通じて 6 年間の常盤台生活を送った。

教員として

大学院の博士課程単位修得後、私立大学に勤務していたが、1996 年から主に経営学部の夜間主コースで非常勤を務めた後、2001 年 4 月に経営学部助教授として本学に着任した。所属の会計・情報学科は、学部、修士時代にご指導を受けた先生や一橋大学大学院出身の先生がほとんどで、すぐに職場になじむことができた。当初は応用簿記論と夜間主コースの簿記原理を担当していたが、セメスター制が導入された 2006 年からは泉先生と交代で昼間主コースと夜間主コースの簿記原理Ⅰ・Ⅱを担当した。学部改組により科目名が変更された現在も、簿記論Ⅰ・Ⅱは私の学生時代と変わらず、金曜日第 3 時限に経営学部講義棟 2 号館 109 教室で開講されている。

特筆すべきこととして、大藪先生の指示の下、溝口先生が開発し、1989 年の大学 4 年次に試行を手伝った授業時間外学修用の教材、簿記 CAI (Computer-Aided Instruction) は、2002 年から Web ベースの CAI へと仕様が変更され、科目数も増え、現在も運用されている。この簿記 CAI は教育上の優れた工夫として、開発・運用に関わった泉先生、高橋賢先生とともに 2005 年に日本簿記学会の学会賞を受賞している。

研究については『横浜国立大学社会系部局 八十年史』でとりあげたので、ここでは簿記教育について述べる。当初は大藪門下で執筆した『簿記テキスト』を使用し、ワープロで作成したハンドアウトを配付していたが、PowerPoint の普及以降はスライドを印刷して配付し、説明していた。2011 年度秋学期には、在外研究先であったカーディフ・ビジネススクールの会計学入門講義に出席し、そこで行われていた書込式のワークブックによる教授法を帰国後、授業に取り入れた。そして 2020 年度からのコロナ禍による遠隔授業時代には、スライドに音声を入れ、オンデマンド授業を行った。従来からの CAI に加え、授業支援システム（Learning Management System）による毎回の復習クイズや Q&A による質問への回答を行ったが、授業アンケート結果を見ると学生の満足度が高くなった。2022 年度からは、音声なしの PowerPoint のスライドを使って対面で同様の授業を行い、難解な箇所については復習用に音声入りの資料も配付しているが、高い満足度を維持している。ただ、「大学は一人で学ぶと書くだろう」という恩師の大藪先生のお言葉、学生が自分で考える力を涵養するという視点からは、教えすぎの感も否めない。

ゼミナールでは財務会計と財務諸表分析を学習・研究しているが、大藪ゼミと違ってメンバーはそれほど多くはない。卒業生は民間企業に就職することが多いが、会計のゼミなので公認会計士、税理士（科目合格）も 20 名ほど輩出している。中には鉄道・旅行系 YouTuber やフリーランスとして活躍している卒業生もいる。

大学の管理運営業務では、入試・広報委員長、教務・厚生委員長などの各種委員長を務めた後、2017 年度から 2018 年度まで経営学部長として学部運営に携わった。就任前に私も関わった学部改組業務が終了しており、退任後がコロナ禍となった時代で、平穏な時代であった。学部運営にご協力いただいた教職員の皆さまに、この場を借りて心より御礼申し上げたい。

かくして 2001 年度から 2024 年度で勤続 24 年を迎え、学生時代と通算すると、100 年のうち 30 年を本学で過ごしたことになる。

学生、同僚とともに歩んだ日々

大学院国際社会科学研究院

教授 梶島 洋美

2003年4月、私は九州大学から転籍する形で本学に着任した。2004年度に全国の国立大学は独立法人化することが決まっており、加えて国社においては法科大学院もスタートすることになっていた。そのため2003年度は、国際経済法学系においても1ヶ月に2回のペースで系委員会が開かれるなど、目まぐるしく変わって行く様子が感じられた。そのような中、法科大学院の設置認可の過程で忘れられないことがある。それは2003年7月だったと思う。研究室で授業の準備をしていた午後、当時の国際経済法学系系長だった池田龍彦先生から内線に電話がかかってきた。設置審の審査に供する書類について次の日までの修正が求められており、これから関係している教職員で書類を作り直す作業を行うのでぜひ手伝ってほしいということだった。その日、大学にいた国際経済法学系の若手は、私と（同じく2003年度に着任した）関ふ佐子さんだけだったようで、私たちは夕方から、法学研究棟の一室で、パソコンでの作業を池田龍彦先生や來生新先生らとともに黙々と進めることになった。確かにその日たまたま居合わせたというだけなのだが、あとでよく考えれば、あの夜ご一緒した先生方は、円谷峻先生と田中利幸先生以外、法科大学院の専任教員予定者ではなかった。結局作業は、次の日の朝方までかかり、6時に正門が開く頃にタクシーに乗って帰宅する羽目になった。聞くところによると、私たちが徹夜の作業を終えて帰宅した後、事務職員の方々は、みなし専任教員や非常勤講師として予定されていた学外の先生方の事務所や大学に、手分けして押印をもらいに行ったという。当時の伊藤守事務長や仁村俊明総務係長には大変かわいがってもらったが、法科大学院設置の直前直後の手続きで大変ご苦労されていただろうということを、時を経て、私自身が学内業務の様々な経験をし、改めてありがたく思うところだ。

教育においては、私は法科大学院で兼務教員として1コマ担当しつつ、法科大学院ではない国際関係法専攻（及び改組後の国際経済法学専攻）の大学院生たちと学び合う、良い環境に恵まれた。着任当初は、少し年上のお姉さんという感じで遊びにもちょくちょく誘ってくれたが、学問のほうでも大変刺激を受けた。2000年代前半はまだ、オンライン上で紀要論文が公開されていなかったにも関わらず、私が大学院生時代に書いた論文を探し出してきて、「あそこであのような議論をやっているが、こういう考え方もあるのではないか」など、教員と学生という分をわきまえながらも菌に衣を着せぬ物言いで、授業もゼミもずいぶん盛り上がったものである。その後も今日まで、大学院という性質上、授業では原則としてリーディングマテリアルを事前に読み、学生が抽出した論点に基づいて議論を進めることを中心に行なっているが、新卒の日本人だけではなく、留学生や社会人経験者など多様なバックグラウンドを持った学生のみなさんのおかげで、私にとっても学びの機会となってきた。2017年に都市科学部が設置された後、都市科学部でも専門科目を提供しており、大学院生との議論が都市科学部の授業に反映される場合もあることを考えると、私に限っての話かもしれないが、大学院教育は教員にとっての成長の糧とも言える。

フィリピンでのフィールドワークについても書いておきたい。もともと、オーストラリアに留学して

いたときの友人との縁でフィリピンに学生を連れて行くことになったのだが、2005年の開始からパンデミック時代を除き、約20年間、授業科目として実施し、延べ300名近くの学生がフィリピンでの隣地調査を経験している。これが実現できたのは、直接関わってくださった池田龍彦先生、荒木一郎先生、館野紀昭先生、辻岡政男先生、上田直子先生、小林誉明先生、米村幸太郎先生、志賀裕朗先生のほか、周りの先生方の理解と、関係する事務職員のご尽力のおかげである。約2週間にわたる現地での活動内容は、ほとんどを学生が決める。学生たちは自分の関心に基づいて、どこに行き誰に会って、どのような質問をするかをまとめ、自分で先方にアポイントメントを取り、渡航前に質問票を送る。現地では、その質問票に基づいて、政策を担当している官僚や企業・NGOの担当者らが説明してくれ、それに対してさらに現地で質問を投げかけるなどして学び、議論をするのが主な活動である。ウェブサイトや既存の研究でわかることは質問しないというルールなので、渡航前に資料を駆使して入念に準備をすることになる。当初は、大学院生だけで行っていたフィールドワークは、現在では学部生も交えて実施している。なお、参加する学生の中に1人でも英語話者がいるときには、日本にいるときも英語で話すことになっている。フィリピンでのフィールドワークは、2007年に文部科学省の大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）として3ヵ年の補助を受けたあと、2010年以降は日本学生支援機構の海外留学支援制度（協定受入）により、学生たちは給付型の奨学金を得てきた。2024年度には、日本学生支援機構から「事前・事後研修 好事例」の欄に紹介されることになった。旅程を作るのは専ら学生の仕事とはしているが、アポイントメントや日程調整でうまくいかない場合は、私から現地協定校のサントトマス大学やフィリピン大学ディリマン校の教員に依頼して電話をかけてもらったりすることになるし、特に訪問先に失礼のないようにする配慮や渡航中の安全面での管理は教員が責任を持ってやらなければならない。毎年、渡航前の2-3ヶ月は他の授業や学内業務に加えて、フィリピン渡航関係の書類作成や学生の指導もあってそれなりの大変さはあるが、毎年学生たちが成長して行く姿を目にできることが何よりの喜びであることは、関係してきた教員に共通する想いであろう。